

発達障がい特性を受け止めるために

NHK E テレ“うわさの保護者会”ディレクターAさんの取材を、9月15日(日)横浜ルミネのスタバで受けました。Aさんは番組を通してLargo小林由紀さんと親交のある方です。11月にうわさの保護者会で「発達障がい」を取り上げようと、元教員の僕への取材でした。

発達障がいを現代社会、特に教育と親・家族そして福祉の現状での受け止めに、正直ウロウロしている僕です。例えば前述の小林さんのご子息Oさん(17歳)は自分を発達障がいと理解し受け止め、情報機器に英知を駆使でき映像や文化や音楽(ピアノ)に卓越しつつ社会に積極的に参加しています。でも、学校教育、特に教科学習には馴染めない過去と現在を背負っています。Nさん(18歳)は、音楽(ギター)と絵画(イラストなど)と運動(バレーボール)に精通し才能を発揮しています。発達障がいを受け入れつつも睡眠とのバランスを含め小中学校には苦戦していました。高校から専門学校では睡眠バランスを維持し学業も優秀な成績を収めています。余談ですが、この取材後神奈川公会堂でバンド演奏するNさんを応援に行きました。(右写真)



中央：ギター女性Nさん(わさモ)

僕の周囲には発達障がいと学校の関係で苦戦する子がいる一方、学校へ行かず充実した日々を送る子どもたちも存在しています。上記のように発達障がいと共に生きる彼女がいて、他方不確かな生きつらさと葛藤の日々を送る彼女がいる。皆生きる悩みと喜びを実感している日々なのです。

先生や親の杞憂 理解と信頼を礎に…

ただ、小中高生ごろの教員や親の「このままでは将来生きていくのが難しい」と未来を予見するかのような助言をしますが、何ら意味をなさない杞憂なのです。むしろ「このままでは…」の言葉は子どもたちの希望と未来を奪う悪しき指導でしかないとの実感です。大事なことは、混乱する子どもへの理解と信頼を築き、自己肯定につながる日々の学びを進める学校であってほしいのです。叱責と矯正という訓練型の指導から、苦戦している子どもたちの学びの工夫改善への教育方針と教育技術の提供を願いたいものです。

インタビューから インクルーシブ教育を問いながら 学校の今を

Aさん: 不登校の背景には発達障がいがあるんですか？

滝田: 誤解を恐れずに言えば、不登校と発達障がいは関係していると思います。それは、発達障害の子どもを追い込む環境が学校(社会)にあり、結果的に子どもは不登校になってしまうとの意味です。僕は約40年前の最初のクラスの子が不登校、卒業後精神疾患を発症しその後作業所に通っています。5年後に担任した不登校の子ども卒業後に統合失調を発症し亡くなっています。大きくは学校環境の追い込みが精神疾患発症を強化したようにも思います。集団や人間関係や学校嫌い(怖いや苦手)だけではなく、拘り偏りという発達障がいの特性が不登校の子にはあります。思春期の発達成長過敏に子ども自身の特性が



表出し、学校環境で刺激を受け葛藤と混乱の結果、学校に行けない行かない現象が生まれていると思います。特に集団的な学び方が特性を刺激し離脱をうながすと思います。

Q:40年前の中学校で不登校は少なかった？

滝田:その頃は校内暴力の時代、子どもが元気で学校も多様でした。学校が遊び場みたいでした。1970年代後半は“病気”“家庭”“怠学”と理解し、学校に来ない子でした。1980年代ごろから登校

拒否が増え「学校嫌い」との理解でした。「学校へおいで」と学校へ引っ張り、子どもは強引に連れだされた感じでした。校内暴力の終わりと交差していじめ・不登校が増加します。

Q:校内暴力がいじめ・不登校へ？ なぜですか。

滝田:校内暴力の対応で管理システムを学校は強化していきます。学校が雑然としていれば色んな子が生きやすかった傾向はあります。教員が生徒と距離を置き指示命令する遠い存在、管理者として登場します。暴力や器物破損は減少し、親や地域そして警察の協力を得て入学から指導を強化し管理体制を高度化していきます。

1990年頃には管理体制がほぼ完成、例えば授業の前後に挨拶をするのは当たり前になりました。「机イス整え、教科書ノートを机に出す、授業に関係ない物はしまう」と先生が言えば、日直が「背筋を伸ばしてください。手を横に。気をつけ 礼 お願いします」と号令をかけ、生徒は一斉に「お願いします」「ありがとうございました」と。毎時間くりかえされ、疑問に思う先生も親もなく、挨拶が管理手段となりました。

Q:今回、学校で発達障害の子が気持ちよく過ごせる先生向けの工夫テキスト集をと…。

滝田:小学校で3割、中学で5割、高校で7割、学習内容の未修得があるとされて久しいです。得手不得手、学習障がいへの偏りもあります。教員の話聞き答えて理解し板書を写す学びのスタイルの限界を僕は感じます。特に一斉授業の国語と算数・数学の座学の課題は大きいと思います。英語や理科・社会が、音楽や図工・美術が、多いのは体育が得意という子です。反面全く英語と音楽と体育が苦手な子がいます。英語や道徳を入れ10教科区分と一斉授業、限界が来ているのではないのでしょうか。

Q:どうしたらいいですか

滝田:子どもの数を少なくすることです。また生徒自身が学び方を学ぶ授業スタイルへの変革をめざすことです。昔の僕の一斉授業の工夫は板書に空欄□を設ける授業でした。教科書から抜き出し写し書く、生徒にとって分かり易いのです。例えば4つの□を書き何文字と示すと書きやすさを増します。またひとり一人の答えを確認するため、合法的な立ち歩きを勧め、教員のところにノートを持って来て○チェックをしました。今はやりのクイズ形式のTV番組？

僕は挨拶が苦手で、授業の始まりは後ろから入り教科書のグループ読みを机間巡視するスタイルでした。時には一緒に読み、時にはゴミ拾い、時には生徒と小声で雑談も。読み終わると生徒は机を戻し僕は前に、今日のテーマを書き授業は始まります。

机の配置も大事。コノ字型とか扇型の机配置、2人机をつけるのは良くないです。刺激を受けやすく、好き嫌いが横行します。一般的な整列型では前の生徒の背中を見ている状態です。自由着席もいいですね。基本的には生徒間の距離、この空間が保障される。机を領土とするなら領海の保障、主権を保障するという(笑)。掲示物の配慮も必要です。

発達障がいの子の「じっとしてられない」、それは永久にそうなのか教員は自問自答してほしいです。落ち着き切り替える時間が必要、そのために立ち歩く自由が保障される必要があります。教員と本人の信頼と約束で「フリータイム要求」が出せるといいです。

Q:小学校の頃にそういう子がいて、クラスの雰囲気を和ませてくれました。

滝田:特別扱いを誤解しています。これは配慮なのです。しかし配慮が他の子に影響してしまう危険を教員は感じます。「何であの子だけが！」との声に怯える教員もいます。まるで“ばい菌”が伝染する不安に飲み込まれる教員、だからみな同じに。配慮はしないという誤解が生まれます。一人ひとり特別扱い、配慮は堂々と。いろんな子がいてクラスは和みますから。

Q:他の親御さんが迷惑を訴えることも

滝田:共生社会を生きる現代は“障がい者差別撤廃法”が施行されています。多様な子の存在を理解するのが現代教育のテーマです。人がいて人を理解していく学びです。仲良くすることが目標ですから、仲良くできない現実から学び始めます。具体的に言えば、教員が発達障害の子を解説し、他の親御さんに啓蒙宣伝する時代です。特性のある子を特別扱いするのではなく、共生の時代を積極的に展開していくことです。20年前、介助員制度がない時代、中学生の自閉症支援にボランティアグループでクラスに入りました。その子の親とボランティアは学年生徒集会で子どもの解説をしました、2年余りの取り組みは穏やかでした。修学旅行に体育祭に日々の授業にボランティアは入り、生徒さんと教員と仲良くなりました。卒業式にはボランティアの席を設けていただき列席、感動的な取り組みでした。

Q:なぜ教員を辞められた?

滝田:学校が詰まらなくなった。学校で不登校の子を支援するのは限界があり、一人ひとりには対応できない。また学校では「学校へ」という視点で不登校の子を対応してしまいます。今一つは教員評価を賃金に反映する時代が来て辞めました。

今の学校は就学主義、戦前から同じです。学校に入学する、学籍があればいいのです。学力の保証がないので支援手立てが生まれません。学びはなく入学と卒業、在籍管理という、生徒在籍管理なのです。学校でしか学べない悪しき国、日本が現状です。以上

Laundry ダンス公演 会員・支援者へのプレゼント

お待たせいたしました。去る7月7日、横須賀応援団で不登校講演とダンス公演をいただきました、asamicro こと松井麻美さんが右の公演「Laundry キョウヲ抜アイデアシタヲ着ル服ヲ洗ウ」を11月3～4日に渋谷で開催します。

研究所と横須賀応援団は熱烈に応援しています。ということで、**チケット各2名6組の方にプレゼントいたします。**ご希望の方は、通信巻末の携帯、もしくはメール・メッセージにてご連絡をください。締め切りは10月20日(日)とします。ふるってご応募ください。今後+αも…

語り合う横須賀応援団会議



Laundry キョウヲ抜アイデアシタ着ル服ヲ洗ウ
踊りと回る 60分間 cappuccino ダンス公演
11月3日(日)午後6時 開場5時半 **2枚2組**
11月4日(月)午後1時 開場0時半 **2枚2組**
11月4日(月)午後6時 開場5時半 **2枚2組**
会場 宮益坂十間スタジオ
(渋谷1-10-7グロリア宮益坂北館5F)
渋谷駅11番出口徒歩3分

By asamicro(松井麻美さん)+minami+miho)

コラム風 DST 人の人生を語りと映像で共有 須磨修一さん

10年以上前になるだろう、NPO 法人アンガージュマン・よこすかで、ひきこもりの若者たちに映像づくりを通して自らを語り合う DST(デジタルストーリーテリング)に取り組んだ、それが右の新聞記事の須磨修一さんです。

若者たちがキラキラ輝き、自らの心の奥を象徴的な映像にし語り合いました。ある青年が喫煙する自分を何とも軽やかに明るく表現し、ひきこもる


自分と家族の在り方を実感させてくれたことを僕は思い出しました。「戦争体験の個人史をしっかり継承しなければ。上映と対話で若い世代に伝えていきたい」と語る須磨さんの穏やかで頑固な生きる姿勢を感じている。須磨さんは56回に及ぶ南相馬の復興交流を続けており、そこでも DST を駆使し震災復興を映像と語りで継承しているそうです。

戦争体験者らの自分史を本人のナレーションと写真で映像化し、多くの人に視聴し、共有してもらう「デジタルストーリーテリング(DST)」に取り組む。

8月に中原区で開かれた市主催の「平和を語る市民のつどい」では、DSTとして編集した2人の戦争体験者の自分史映像を上映。本人が登壇し、来場者と語り合う場の司会進行役も務めた。

人々との対話を重視する。「私たち戦後生まれが、体験者の個人史をしっかり継承しなければ。上映と対話で若い世代に伝えていきたい」

映像で戦争体験伝え



「世研話」代表
須磨 修一さん (63)

それぞれの風

○1Pからのインタビューと重なりますが、藤沢市の池谷裕子さんが、ご自身のお子様との不登校体験を通して貴重な投稿を神奈川新聞に(左写真 9月10日)。「学校に行く子、いかない子が対等に生きられる社会で」、僕も実に同感です。

○9月の横須賀応援団会議は8月に次いで発達障がいと不登校を具体的に考える場となりました。幼児や小学生も5人参加し19名で、放課後デイを利用するための“受給者証”が不登校を理由にストップしている現状を問い直しました。障害福祉と教育行政連携、学校長とワーカーの子どもの最善への無理解を実感しています。代表龍崎さんも“移動フリースペース・屋台”を提言しながら、この問題を次回整理提案していただきます。

10月予定 ○1日(火)10:00~Largo 研修会(鎌倉応援団)in ぶかふか ○3日(木)10:00~12:00:講演会「子どもとのかかわり方~折れない心を育てるには~」in 朝比奈小学校 PTA ○5日(土)13:30:お伝の会 in 戸塚 YMCA ○16日(水)10:00~12:00:講演会「思春期は大変です子どもも親も~だから楽しく笑顔の親になるのです~」in 一本松小学校(西区 PTA 連協) ○26(土)13:00 逗子応援団会議 ひきこもり発信プロジェクト:新井秀

浩&ゆずり葉の会:橋本由美子 in 逗子市民交流センター ○27日(日)14:00~16:00:横須賀応援団会議:龍崎明信 in 横須賀市民活動サポートセンター ○研究所開催日:10・17・24(木) ○鎌倉市1・4・8・9・11・15・18・22・25・29・30日 ○31日(木)10:00~Largo 相談(鎌倉応援団)in ぶかふか

【発行編集:滝田衛】住所:鎌倉市七里ガ浜東2-31-12 携帯:09072124055
 ●メール: qq5656r9@happytown.ocn.ne.jp ●研究所ホームページ: <http://shichirigaoka-lab.jimdo.com/>
 ●応援団フェイスブック: <https://www.facebook.com/kodomowakamono.ouendan/>

■学校以外で学ぶ選択肢

医師 池谷 裕子 47

夏休みが終わる頃から「学校に行かなくていい」というメッセージが、ちまたにあふれた。だが、学校を休んで元気を取り戻してもすぐ復学できるとは限らない。

小学生のわが子も不登校は「当然」であり「学校に行かなくていい」といって驚いた。不登校は誰にでも起こりうるし、増加の一途にある。日本でも学校以外の公的な教育オプションとしてホームスクーリングを制度化すれば、皆もつと自由に生きられるのではないか。学校に行く子、行かない子が対等に生きられる社会であってほしい。(藤沢市)